

氏名	麻 生 武
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第3360号
学位授与年月日	平成9年12月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当者
学 位 論 文 名	身ぶりからことばへ —私たちの起源：共同化された世界と身体への成立—
論文審査委員	主 査 教 授 金 児 暁 嗣    副主査 教 授 上 野 雄 宏 副主査 教 授 豊 田 ひ さ き

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、人間のコミュニケーションにおける共同性の起源を、麻生氏の長男U君の生後一年間にわたる日誌的な生態学的観察記録によって、理論的に解き明かそうとしたものであり、序論「本論文の学史的位置づけ」、ならびに第1部「世界を分かち合うために」と第2部「私たちの起源を探る」より構成されている。

序論は、日誌的な研究方法によった本研究を、現在に至る発達心理学の研究の流れの中に、学史的に位置づけたものであり、日誌的研究方法の現在における復権や、本研究の扱った“間主観性”という研究テーマの重要性を学史的に指摘している。

第一部「世界を分かち合うために」の第1章、「共同性についての問い」では、“知覚世界の共同化”と“自己と他者との同型性”という概念の問題性を思考実験によって導入したうえで、この2つの問題について、ヒトの系統発生をとらえる視点から、チンパンジーに関する諸文献などを基に考察し、チンパンジーが“知覚世界の共同化”と“自己と他者の同型性の確立”の水準にほぼ達っしかかっていることを明らかにしている。

本論文の主要部分を構成する第二部「私たちの起源を探る」は5章から成り、一人の乳児の縦断的観察資料の分析を通じて、生後1年目における“知覚世界の共同化”と“自己と他者の同型性”との成立のプロセスを議論している。

まず、第二章「現象をとらえる視点と方法」では、身近な出来事を取り上げて、子どもとその周囲の者たちのコミュニケーションを観察するさいの方法論的問題を検討し、論者が採用する観察の視点と資料収集がエスノメソドロジーの立場でなされたものであることを指摘している。

そのような観察資料の分析を通じて、第三章「人としての誕生」では、“欲望”や“欲望する身体”は最初から与えられているわけではなく、それらは人々とのコミュニケーションの中でしだいに構成されていくことを、生後6か月間の乳児の“欲望”の発達が6つの段階によって特徴づけられることによって明らかにしている。そして、ヒトが、乳児のきわめて初期から、「他者との関係」の中で「自己の欲望」を肥大させるという、他の動物にない特徴をもつことを指摘している。

第四章「共同化される行為」では、言語理解がまだ成立していない生後6か月未満においても、乳児は周囲の大人の特殊な音声を特定の知覚対象と結びつけて知覚し、このことが後の言語理解の基礎となっている可能性を示唆し、周囲の人々の眼差しの下で、乳児の対物行動は新しいタイプのコミュニケーション行動として機能し始めることを指摘している。さらに、乳児が他者をエージェントとして知覚できるようになることの意味を、新たに導入された“行為の共同化”という概念を用いて理論的に論じている。

第五章「共同化される世界と身体」では、ギビングや手差しなどの身ぶりの発生の分析を通じて、生後10か月頃から“対象世界の共同化”が成立していくことを論じている。また、乳児の模倣活動の観察資料から、同時期に自己と他者とが“同型的なもの”として組織されつつあることを指摘している。それと同時に、「他者の模倣をしたい」という気持ちが出現して来ることを示し、“共同化された”「主体」と“共同化された”「志向性」と“共同化された”「対象」の3つが、三位一体的に同時期に成立することを指摘している。

第六章「言葉としての“身体”」は、第五章まで論じてきた内容の総括に相当する。ここでは、まず最初に、思考実験によって、ロボットが“語る主体”になるためには、ロボットが自己の身体を“基本的に他者と同型的なもの”として組織化している必要があることを主張する。そのうえで、生後1年目で獲得される“対象世界の共同化”と“自己と他者との同型性”と“他者と並ぼうとする自己の志向性”の獲得が、「ことばとしての身体」の獲得を意味していることを、数々の事例を用いて議論している。そして、このような身体の獲得が、系統発生におけるヒトの言語の獲得と密接に関連していることを指摘している。

### 論文審査の結果の要旨

本研究のきわだった特徴はその独自の問いにある。一つは、私たちはいつ頃から自分と他者とを似た身体をもつ存在として認識し始めたのだろうか（自己と他者の同型性）という問いであり、もう一つは、私たちはいつ頃から知覚された対象世界を自分だけにではなく他者にも開示された世界であると認識するようになったのか（知覚世界の共同化）という問いである。つまり、生後一年目における“自己と他者の同型性”と“知覚世界の共同化”の成立プロセスを、発生学的な視点から解明することが本論文の中心的テーマである。この問い自体の斬新なることをまず高く評価したい。

序論「本論文の学史的位置づけ」では、本研究で採用される日誌的観察方法が、方法論的にはきわめて古い研究方法であるが、近年、発達心理学研究において再評価されつつあることを学史的に明らかにしたうえで、従来の発達心理学ではほとんど注目されてこなかった「コミュニケーションにおける間主観性の成立」という本論文の研究テーマの重要性を力説している。そして、このテーマを研究するにあたって採用される、いわゆるエスノメソドロジーについて触れている。論旨は明快かつ着実であるが、エスノメソドロジーの発端となったフッサールをはじめ、ガーフィンケルやシュッツに言及すれば、論考はさらに深みのあるものとなったであろう。

第2部で資料とされた縦断的観察記録は、原稿用紙3800枚に及ぶものである。間主観性の成立という観点に立った、このような日誌的観察記録は従来見られなかったものである。この第2部は、本論文の中でもとくに論者独特の理論が周到に展開されている部分であり、説得性に富むと同時に、従来の発達心理学研究が気づかなかった視点を提示し、今後の発達研究に新たな地平を開いた意義は高く評価されよう。ただ、本研究において重要な概念である“身ぶり”について、その定義がやや包括的な嫌いがあり、今少し本論に即した定義が必要であったかと思われる。

従来、発達心理学に限らず心理学研究の大筋として、ヒトを分析対象として可能な限り客体視することがオーソドックスな方法であった。本論文は、叙上のとおり、こうした自然科学的な見方では捉えきれない側面を、自己と他者との同型性ならびに知覚世界の共同化という観点から浮き彫りにして見せたという点で、画期的労作であり、発達研究に重要な一石を投じたといえよう。今後、論者には、本論で明らかにされた諸知見をこれまでの発達心理学の知見や心理学における諸理論と対応づけることによって、より普遍的な理論構築を目指すことが期待される。

以上の所見により、本論文は大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。